梶田叡一著「教師・学校・実践研究　人間教育の基盤を創る」金子書房 2005 年 8 月 25 日刊を読む(Ⅲ)

真の「エリート」の育成を

１．はじめに

①もとより、職業に貴賤はなく、社会的な役割に尊卑はない

②しかし、社会の他のメンバーの生活や人生に多大な影響を及ぼしかねない職業や役割が存在することは、誰も否定しないであろう。

③例えば、政治家や高級官僚、経済界や学界の指導者、そして報道関係者や指導的評論家、思想家などである。

④そうした仕事に就く少数者は、当然ながら、さまざまな資質の点で優秀でなくてはならない

⑤強い使命感と責任感を持っていなくてはならない

⑥選ばれた少数の優秀者という意味で「エリート」と呼ばれるのも、そのような人たちのことである

２．日本に真の「エリート」が存在するか

（１）①ところで、我が国の現状を見るとき、そうした「エリート」が十分に存在し、有効に機能しているのか

②さらには、そうした「エリート」を育てる社会と教育の仕組みができているのか

③もちろん、我が国に、政治家や高級官僚をはじめとする「エリート」的職務に従事している多くの人がいないわけでない

（２）①現在そうした「エリート」的職務に就いている人たちの多くが、使命感、識見、品性、能力、責任感、等々の点で、真に「エリート」と呼ぶに相応しいものと言い得るのであろうか

②現在の激烈な進学競争のなかに、真に「エリート」と呼べるような資質と使命感・責任感を育てる教育がはたして存在しているのだろうか

③真に「エリート」と呼べるような将来性を持つ人を選んで必要な経験と研鑽の機会を与え、適切な「エリート」的職務に就けていくための仕組みとして、現状のあり方は妥当なもの、適切なもの、と言い得るのだろうか

（３）①従来のあり方のままでこれからもやっていけるのかどうか

②現在の「エリート」のあり方で、従来の「エリート」育成・選抜のやり方で、内外に課題が山積し、しかも先行きの不透明な 21 世紀を乗り切っていけるのだろうか

（４）①現状に対する大きな不満として、「エリート」的な職務や人物の存在も必要性も頭から否定してかかる「建前」が、我が国の社会に、特に第二次大戦後 40 数年にわたって根強く存在してきた

②こうした社会的雰囲気が長い間支配的であったため、「建前」としての「あらゆる選別・選

抜反対」の陰で「本音」としての受験競争の激化を招いたのではないか

③そこでは、「建前」にしても「本音」としても、学校教育が単なる社会的地位上昇の道具としてしか認識されないことになり、高い学歴に伴うべき識見や品性、使命感や責任感、などの形成が顧みられないままになる、という弊害を生んできた

④民主主義社会においても、少数の者が選ばれて指導的役割を果たさざるをえない、という当然の前提をすべての人が承認し

⑤そうした「エリート」的な人物には、識見や能力だけでなく、他の人々が眠っている間も、その人々のために悩み、考え、手を打っていくという強い使命感と責任感が必要であることを、すべての人が認識しなくてはならない

⑥こうなったときにはじめて、単なる有名大学進学や、人気のある職種への就職、あるいは高い収入や名誉の問題としてでなく、新しい時代を指導者として担っていくべきものとしての「エリート」の育成が考えられる

３．特権階級意識を排除した「エリート」意識の建設

（１）真の「エリート」の備えるべき不可欠の属性として、特権階級意識の排除をまず考えておかねばならない

（２）①少数の指導的階層が特権を持ち、優越感を持ち、大衆から切り離された生活を送るならば、その社会に発展は望めない

②特権階級意識を持つ指導者は、その当初はいかに善意と使命感にあふれていたとしても、年月と共に堕落し、腐敗していく

③これもまた、歴史が我々に明瞭に語るところである

（３）①指導者は大衆からの指示と共感的支援があってこそ、実りある成果を手にすることが可能になる

②リーダーシップとフォロワーシップとが表裏一体の問題として論じられてきたのも、この意味で当然のことと言ってよい

③新時代の「エリート」が、大衆のなかから生まれ、大衆と共に活動する、という原則を持つべきである

④したがって、「エリート」は、すべての人に共通の、水準の高い初等教育を基礎に、中等教育においてその個性を十分に伸ばし、互いに切磋琢磨するなかで、自然に生み出されてきてほしい

（４）①各人がそれぞれの場で、自分に与えられた使命に責任を持って取り組むべきであり

②その意味で役割や職業の間に貴賤はないことを、将来の「エリート」を含め、すべての人に徹底して教育していくべき

③大衆と指導者との一体感を前提にしつつ、国民的合意を背景に、全国民的な頑張りを土台として、適切な方向に人々を導いていくのが「エリート」の基本使命だからである

４．グローバルな視野と「先憂後楽」的姿勢の育成

（１）①今や、我が国の問題を、我が国のなかだけで解決することはできない

②我が国の当面の利害を離れ、常にグローバルな視点から物を考えることが、「エリート」に求められざるを得ないのである

（２）①「エリート」に身につけておいてほしい人間的特質は「先憂後楽」の精神態度

②多くの人が問題の重大さに気づかないまま安逸な日常生活に嵌り込んでいるとしても、たとえ自分一人であろうと目覚めて苦悩し、問題の解決に腐心し、自分に可能な限りの社会的働きかけをする、という態度

③こうした姿勢は、現代社会では多くの場合、社会的な嘲笑と憐憫の的になる

④結局はドンキホーテ的なあり方としてしか見られないかもしれない

⑤しかし真の「エリート」なら、そうした誤解など、いささかも気にしないのではないだろうか

（３）①多くの人々からの拍手と尊敬を得ようとして、ことさらに人々に迎合して安易な主張を垂れ流し、当面の問題をより一層深刻化していくかに見える評論家、大マスコミ、高位の官僚や政治家が横行している現代社会である

②だからこそ真の「エリート」には、反時代的な「先憂後楽」的姿勢が不可欠なのである

（４）①「エリート」が社会的にうまく機能してゆくためには、「人間的な魅力と人望」と「強い使命感と責任」も不可欠

②こうした人間的特質を含め、日本の社会に真の「エリート」を輩出する学校が、少数でもいいから、何とか出現してほしい

③受験有名校ではない真の「エリート学校」の創出を、日本社会の未来のためにも真剣に考えるべき時ではないだろうか

P90 ～ 95

＜コメント＞

梶田先生の「現代エリート論」。「地元を支える人材」の育成と同様、「真のエリート人材」の育成も不可欠。では、これをどのように行ったらよいか。大いに議論いたしましょう。

2024 年 7 月 28 日（日）

林　　明　夫